



2024年 年頭ごあいさつ

会長 阿部 一郎

新しい年が始まりました。2024年も皆さまと一緒に、より活力あるクラブを目指してまいります。

しかし折も折、石川県の能登半島で大きな地震が発生しました。この文章を書いている1月6日夕刻の時点でも、余震は頻発しており、死者や安否不明者も日を追うにつれ増加しています。

あらためて私たちの国が地震大国であり、いつなるとき自らの身に降りかかるかもしれないことを痛感します。この場をお借りして、令和6年能登半島地震で亡くなられた方々のご冥福をお祈りしたいと思います。

今まで日本を覆った自然災害でも同様だったと思いますが、今回の被災者の中には、少なからず外国人の方たちもおられます。人口減少、少子高齢化を迎えた私たちの国では、労働現場の人で不足は慢性化しており、特に過酷な労働環境で働く外国人労働者の数は年々増加しています。いわゆる技能実習や特定技能の在留資格を持つ人たちです。

輪島市や珠洲市では、漁業のお仕事をされているインドネシアからの人たちが、避難所にも入れず、食料も不足している状態で支援を待ち続けています。

日頃私たちの国際交流の相手は、姉妹都市の関係者や留学生の皆さんが多いと思いますが、日本の経済や私たちの暮らしを支えている技能実習生などの皆さんと向き合うことは、どんな国際交流団体にとっても、大きな使命だと思えます。

社会の変化に対応できない組織や団体に未来を描くことはできません。

その文脈で、昨年からは箕面市ハット市友好クラブでも新たなチャレンジを始めています。

それは、昨年の10月から箕面メキシコ友の会と共催して始まった『箕面市姉妹都市交流プラットフォーム事業検討会』です。その目的は、これからの箕面市の姉妹都市交流の未来を、行政や国際交流協会に委ねるのではなく、関係する多くの市民団体の皆さんと一緒に考えようというものです。

参加団体は、箕面ロータリークラブ、箕面商工会議所青年部、一般社団法人箕面青年会議所、公益財団法人箕面市メイプル文化財団など10団体を超えました。その中には、インバウンド観光やまちづくりの関係者も含まれており、多様な団体との話し合いの場となりました。

本年も、2025年の大阪・関西万博や箕面市・ハット市国際協力提携30周年を睨みつつ、多様な団体との協働を視野に入れて、本クラブが社会の変化に対応して、社会に貢献できる団体になることをめざしてまいります。

これからも、皆様のご協力をどうぞよろしくお願いいたします。



箕面市姉妹都市交流プラットフォーム事業
キックオフミーティング



箕面市姉妹都市交流プラットフォーム事業
検討会議 (上下写真)



2023阪大夏まつり

川島 一彦

前年に引き続き2023年もお誘いがありましたので、大阪大学の夏まつりに参加しました。構内の教室を一つお借りして、ポスター、地図、国旗、冊子などを陳列し、来場の皆さんに当クラブの存在をアピールしました。

前半に箕面東高校とNZの両弓道クラブがオンラインで交流することが出来て、かなり盛り上がりました。これは大きな成果だと思います。また箕面市長も大学の学部長も立ち寄られ励まして下さいました。

やはり主催が国立大学という事もあって、我々のような地味な団体にもそれなりに関心をもってくれる人々が多かったように感じました。これを契機に、地元の大阪大学と我がクラブがもっと密接な関係を築けるよう努力を重ねたいと思います。



ご来場の皆さんの目に留まるよう工夫しました



箕面東高校弓道部とNZ弓道クラブの皆さんとのズーム交流



NZワインの集い

加藤 俊明

色・香りそして4年ぶりの顔と顔、みんなで味わうNZワイン。笑顔・歓声、NZハット市の皆さんの優しいまなざしもまぶたに浮かびます。お花見に続いて、コロナ後の集いが戻ってきました。

毎回ボランティア参加の高名ソムリエの分かりやすいご案内に味わいも新た、馴染みのNZワイナリー：マルボロ、ホークスベイなど、そしてすきとおる甘い香りの葡萄品種の名も、いつしか親しみに変わります。

長年の隔たりのせいか常連の方々も少し寂しく、でも新たな皆さんやお子たちも加わり、絆を深めた30有余名。この素晴らしい集まりに会員の方々もより多く、と思うのは幹事の私だけでしょうか。

味わいに名残を惜しむ間もなく、寄付いただいた素敵なくじ引き景品に二度ニッコリ。参加の皆さんありがとう、また来年もお会いしましょう。



(左から)
マルボロソーヴィニオンブラン 2022
ホークスベイシャルドネ白 2020
クリムピノ・ノール 2021
ホークスベイメル・カベルネ 赤 2019



キウイパーティー

窪 敏夫

12月3日(日)、年末恒例のキウイパーティーを船場生涯学習センターで開きました。今回は運営委員の手による初めての“手作りパーティー”でした。

当日は先ず今年11月にハット市で開かれた『Hutt Japan Day』で撮った動画からのスタートです。

『Japan Day』は毎年ハット市で行われる日本祭り、毎回大勢の人で賑わうイベントです。このイベントに今回初めてハットクラブがブースを出しました。運営委員の河野さんの大変な努力で実現したのですが、会員の寄付や地元篤志家の方々からのご支援で箕面の産品を集め、河野さんが自費で渡航してのブース展示でした。当日はブースも大賑わいで、持って行った産品はアツと言う間に無くなったそうです。そんな賑やかで『顔の見える交流』が画面から伝わって来ました。

その後、箕面市特命大使「箕面マウンテンバイク大使」として市内外、国内外でご活躍されている方のお話、ハット市とのオンライン交流、ハットクラブ軽音部による演奏、ビンゴ大会と続き、一年を締めくくる楽しいキウイパーティーになりました。



運営委員が買い出しや会場設営をして、アットホームな雰囲気となりました



CIRのトレースさんは和装でお出まし。NZの歌「ホキマイ」を歌いました



NZ土産がたくさん並んでのビンゴ大会

みのおNPOフェスタ 2023

六角みよ子

かやのさんべい橋補修工事のため、10月28、29日の2日間に涉っての開催で、箕面市内で市民活動をする21団体が参加しました。ハットクラブは29日（日）に、市民活動センターのロビーにブースを出しました。今までの活動を紹介する写真やニュージーランド関連資料やNZ（Hutt市）バナー広告の看板などで、NZの雰囲気を出し、本クラブの説明をしました。

人々に興味を持ってもらうためには、「NZのお菓子とか、バッジとか、小さなプレゼントのサービスが必要である」、とスタッフ全員が感じる今回のフェスタでした。

3月23日には、地下鉄延伸開通・箕面萱野駅が開業となり、2024年の当フェスタには、大きな人の流れが予想されるようです。



感謝！感謝の Hutt Japan Day

河野 寿一

2023年11月19日4年振りに開催されたHutt Japan Dayに参加して沢山の感謝に触れたこととお話します。

一つ目の感謝は、まず4年振りということで、天気は優れなかったものの沢山の参加者に感謝です。主催者側の公式の発表はありませんが、食べるものが1時頃には殆ど売り切れになったことをみても日本をテーマとしたイベントに対する皆さんの関心の高さを感じました。日本にこんなに興味を持っていただいていることに感謝です。

2つ目の感謝は、「ザ・箕面」で挑めたことです。机一つのスペースに、箕面の各方面からたくさんの協力頂いた商品を前面に展示し、来場者の方からの「もみじの天ぷらって何？」や「箕面ビールはどこで買えるの」「ゆずるくんのデザインの由来は？」等の質問に答えながら、しっかりと「大阪に箕面在り」を伝えられたと実感しています。こんな小さな活動に出発直前まで協力頂いた箕面市の皆さんに感謝です。

そして、3つ目の感謝はハット市に住む方々の手助けに感謝です。初参加ということで判らないことが多い中でも何とかブースを運営することが出来たのも、現地の方の支援あってのことです。現地の肌覚を通してのアイデアを頂きながら、忍者ゲームやけん玉、そしてくじ引きなど昔ながらの日本のイベントを楽しくやれたのも、彼ら無しには到底成し得なかったと心から感謝しております。

ここで改めてHutt Japan Friend Ship ClubのDasiukeさん、Upper Hutt Multi CouncilのYukoさん、そしてWainuiomata High Schoolに留学中のMayuさんを始め沢山のご協力で感謝の意を表したいと思います。

そして、最後に今回のイベントを企画し開催して頂いたHutt Minoh TrustのBrady氏を始めとするHutt市の方にも感謝申し上げます。まさに感謝、感謝の連続のHutt Japan Dayでした。



韓国蔚山の友人たちとの国際交流 佐野 智宏

21年前、彼らとは韓国蔚山での国際会議（私が所属していた池田JCと蔚山JCとの姉妹LOM会議）終了後、懇親会でお酒を酌み交わしたことをきっかけに友達になりました。お互い若かったし、お酒もまあまあ強かったということもあり、朝まで飲んで語り合ったことを覚えています。語り合ったといっても、私はハングル語はできないし、彼らも日本語を全く話せないので、カタコトの英語を中心にコミュニケーションしただけですが、2回目に会った時には「俺たちはチング（韓国語で友達の意味）だ」と言って、その証として時計をくれました。私もその時の勢いで、当時着けていた大事な時計をあげました。それからというもの、毎年お互いの国を行き来して、その度にアテンドし自分たちの住んでいる社会や文化、産業、経済を紹介し、時には一緒に風呂に入って政治の問題を話し合いました。

2023年11月、コロナ禍が明けて久しぶりに訪韓。関空へ向かう最中大渋滞に巻き込まれて、人生で初めてエアのチェックインに間に合わないというトラブルがありました。笑。

今回は、彼らのアテンドで丸3日間、蔚山、慶州、釜山と回ってきました。初日の晩に行ったカラオケでは、今の親友関係に感動してお互いに号泣。本当に良い関係を築けているなと心から感謝しています。来年3月には彼らが訪日するので、精一杯おもてなしをしたいと思います。



人との繋がり、絆

門浦 智



2022年度に入会させていただき、2023年度からは運営委員を仰せつかっております。さて2024年は能登半島地震、そして羽田空港での航空機衝突事故と本当に心を痛めた年明けとなりました。亡くなられた方のご冥福をお祈りするとともに、被災地の皆様にはお見舞い申し上げます。

私は兵庫県香美町の出身で、1日の午後には箕面を出て家族で実家へ向かっておりました。夕方、豊岡まで帰ってきたころ、ふと車のテレビをつけると津波の避難指示の表示が。目を疑いましたが香美町も対象になっていました。と同時に父親から電話があり、今避難しているから戻ってくるな、とにかく高いところに居ると。また同級生のLINEグループでは、「大丈夫か？無事か？」「今避難してる！」など飛び交ってました。

状況は動かずどうしたものかと思っていた時、豊岡に住んでいる妹夫婦から電話が入り、「とにかくうちに来たら？」と、一晩泊めてもらうことにしました。ほどなくして避難指示は解除され、両親も同級生たちも家に戻ったと連絡が入りました。安堵したのと、うちの子供たちは一足先にいとこ同士会うことができ喜んでいましたが、今回の一件で「繋がりとは」「絆とは」みたいなことを感じました。お互いがお互いを気遣う、助け舟を出すなど。今回の災害で日本全国からはもとより、国境を越えて海外からも支援が集まっています。これも繋がりがあるからこそ、絆があるからこそかと。今ある繋がり、絆を深め広めていくことが、後進の役割なのかなと、そんなことを感じた2024年の幕開けでした。



日本NZセンターの紹介 事務局長 手越百合子

日頃よりお世話になります。日本ニュージーランドセンター事務局長 手越百合子と申します。貴友好クラブ様会報への寄稿のご依頼を頂戴しまして、私どもの日本ニュージーランドセンターの閲覧室のご案内をさせていただきます。

日本ニュージーランドセンターは、日本とニュージーランドの人と人の交流をキーワードに独自の交流プログラムを実施し、以前箕面市でALTをしておられたミシェル ギブソンさんも私どもの「京菓子資料館見学」交流会にご参加になり楽しんで頂きました。また、河野運営委員様にはセンター閲覧室へご訪問頂き、貴クラブ様発行本の寄贈を頂きました。オフィスは地下鉄天満橋駅から徒歩1分の谷町筋に面したビルにあり、どなたにもご利用頂ける閲覧室がございます。閲覧室書架の本も、ニュージーランド大使館から寄贈を受けた書籍も増え展示されています。

★ニュージーランド学校の教科書（主に中1 Year9用）★ニュージーランドの代表的料理本Edmonds Cookery Book、★Maori/English Dictionary ★ニュージーランド道路交通規則本（ROAD CODE）等々、ニュージーランドに関する興味深い書籍が揃っています。閲覧室の本の貸出はいたしておりませんが、箕面市ハット市友好クラブ様や箕面市内の学校でのご利用の際は、ニュージーランド紹介ツールとして31点が梱包されている「ニュージーランドキット」の貸出で協力させていただきます。キットの貸出に関し詳しくは、センターホームページ内の www.jnzc.jp/kit.html をご参照ください。センターは普段はテレワーク制ですが、事前にご連絡いただければ閲覧室をご利用いただけます。お近くにお寄りの際は一度覗いてみてください。



「ローワーハット 最初の庭園都市」も展示しています



壁のポスターは NZ の食育推進ポスター



閲覧室



People-to-people connections through sister city exchanges



*To Committee Members of Minoh Hutt Friendship Club
In my appreciation for giving me an opportunity to write this article
With respect, Hiromi Morris in Wellington, New Zealand*

*Taylor Marston-Auckland, New Zealand
He aha te mea nui o te ao? He tangata! He tangata! He tangata!
What is the most important thing in the world?
It's people! It's people! It's people!
-Moaori proverb*



※ お二人の寄稿文（3ページ構成）は「P.6 クラブからのおしらせ」に続き載せています。

昨年の活動

昨年はコロナからわずかに開放され、私達のクラブの集いも以前の姿に。NZワインの集いは4年ぶりの開催でみんなの笑顔も戻りました。しかし一方で、足掛け4年に渡る休眠は、集まりの分断、世代の高齢化など残念な形を残したことも否めません。

みなさんに育てていただいた英会話サロンもその余波を受けしばらく休会となりました。

今年は新たな活動に向けて一人ひとりの工夫・意欲が望まれます。

コロナ前の活動の姿に

- ・ 3月：万博公園のお花見
- ・ 6月：総会・意見交換会（昨年に続き対面開催ですが、茶菓は自粛）
- ・ 7月：阪大まつり参加（阪大船場校舎、昨年につづき2回目の参加）
- ・ 10月：第16回NZワインの集い（市民活動センター、試飲会から名前改め）
：NPOフェスタへの参加
（市民活動センター、多民族フェスティバルでの親しまれてきたNZワインのカップ販売ができなくなり、クラブ広報の機会として改めて参加に）
- ・ 12月：キウイパーティ（ハットクラブ忘年会）（初の会員による手作りの集い）

事業継続の休止

- ・ 各月（8、12月除く）：英会話サロン 10月から休会となっています。

クラブ表彰

- ・ 2月：「ローハット・最初の庭園都市・翻訳本：2020年5月発行」
箕面市長表彰をいただきました。
皆さまのご協力の賜物です。



箕面市長賞
翻訳参加の皆さん

その他 お知らせ

1：ハット市美術協会と積極的に交流している「箕面市美術協会」九後稔会長(No.53に寄稿いただいた)が、昨秋第10回日展にて「東京都知事賞」を受賞されました。

ここにその栄誉をたたえ、より一層ハット市との交流が発展されま

すよう応援したいと思います。

第10回 日展 神戸展 2/17~3/24 神戸ファッション美術館2階（六甲アイランド）

入場料：一般1,200円、65歳以上600円

九後氏作品解説：2/22（木）14:00～ 於：4階 第1セミナー室 50名先着順



第10回日展 授賞式 ↑
← 受賞作品『わ』

2：Hutt Japan Day

P.3で紹介しましたとおり、ハットの皆さんの協力もあり、多くの方々に楽しんでいただきました。

ブースでの箕面グッズ紹介と提供へのご寄付等、ご協力ありがとうございました。余剰金はクラブ会計に納めます。

今年の活動

・ 月々の運営委員会開催、年2回の会報発行など例年どおりです。会報では、会員相互のコミュニケーションツールとして、さらに外部関連団体との連携も求めて参ります。

また、昨年より新たに西南図書館を拠点とした西部地域での国際交流を活性化するべく、検討を進めています。ご期待ください。また皆さまのお力添えもよろしくおねがいします。（P.1参照）

- ・ 令和6年能登半島地震被災者救援への寄付

多文化協働ネットワーク経由で、クラブから寄付いたします。費用はキウイパーティ会費の余剰金を活用します。

年間活動予定

（詳細未定ですが、下記以外にも活動拡大、充実を求めて参ります。）

- ・ 1月：ハットクラブだより No.55 発行
- ・ 3月：お花見（3月末～4月初め・万博公園）
- ・ 6月：総会・意見交換会
ハットクラブだより No.56 発行
- ・ 7月：阪大まつりへの参加（阪大船場校舎・3回目の参加になります）
- ・ 10月：第17回NZワインの集い（一般市民参加募集）
：NPOフェスタへの参加
（近年2回目・市民活動センター、多民族フェスティバル参加に替えて）
- ・ 12月：キウイパーティ（ハットクラブ忘年会・国際交流の高揚を軸に、より活力ある集いを模索）



お願い

開催連絡は原則Eメールによります。

お持ちでない方は面倒をおかけしますが、予め開催予定1ヶ月ほど前に確認をお願いします。



編集後記

このたびの能登半島地震で亡くなられた方々に心よりお悔やみ申し上げます。そして、被災された方々にはお見舞いを申し上げます。一日も早い復興を願っております。

国際交流、姉妹都市交流を通じて、世界中の人々が助け合い、平和がもたらされるよう考えていきたいです。

皆さまからの寄稿文を拝読して、今回のデザインのテーマを『つながり』にしました。



People-to-people connections through sister city exchanges

*by Hiromi Morris, Emeritus President and Taylor Marston,
Board Director Sister Cities New Zealand Inc. operating as
Global Cities New Zealand*



In writing this article, I am remembering the beautiful scenery – blue sky and countless white sheep in vast green fields, which I saw from my plane when I first visited New Zealand as a young student.

I could not have foreseen that New Zealand would become another home for me and that I would get involved in sister city activities for such a long time.

The visit was an eye-opening and fascinating experience to interact with people with different coloured eyes and hair. It also was an opportunity to see my own country from the outside and learn about Japan's uniqueness as a largely monoethnic country. My homestay Mother taught me the importance of understanding, accepting, and respecting different cultures to harmonise society.

Over recent years, New Zealand has become more cosmopolitan, with over 230 ethnicities living in the community, and the concept of diversity and inclusion is significant.

I was touched by many kind, friendly and warm New Zealanders, and this enlightening experience led me to get involved in supporting people-to-people connections since the Wellington-Sakai sister city relationship was formed in 1994. It was something to contribute back to society.

I became the first non-European woman on the SCNZ board in 2008. I clearly recall the first board meeting I attended, where only senior European men with local government backgrounds were sitting around the table.

It was totally opposite from my expectations as the board did not reflect the concept of global connections. Developing further people-based connections is a government policy and Mayors open doors for communities - a citizen diplomacy.

My strong beliefs have been collaboration and working collectively with a wider range of organisations, Embassies, Central/local governments, businesses, communities and schools, and connecting with young people, our future leaders, to pass on our knowledge and experiences. We can also learn from young people with their fresh and modern ideas.

I have organised conferences and forums since 2012, culminating in the 2022 Forum, which coincided with the diplomatic anniversaries of New Zealand's diplomatic relationships with the USA (80 years), Japan (70), Korea (60) and China (50). This function demonstrated the value of collaboration with a broader range of enthusiastic people interacting, including the four Ambassadors and the participants.

I took the position of President from 2012 to 2022 as the first non-New Zealander and the longest serving. In this role, it has been pleasing to see the change in board and advisors becoming a more diverse and colourful representation of the membership. I launched SCNZ's Youth Subcommittee in 2016 and will continue mentoring this group.

Sister City visits are a hands-on way to experience other cultures and their people. I feel very fortunate to be able to connect with many people, and I am grateful for their kind support and encouragement shown to me over nearly three decades.

It was my privilege to see friendship and understanding develop, which have reinforced the basis of the founding of the sister city movement in demonstrating that there are no boundaries between nationalities.

We may look different, but we are all the same under the skin.

To Committee Members of Minoh Hutt Friendship Club

In my appreciation for giving me an opportunity to write this article

With respect, Hiromi Morris in Wellington, New Zealand



Above: Forum at the NZ Parliament in November 2022



Left: With young leaders

The first time I heard of sister cities was on Wikipedia in high school. If you look at any city on Wikipedia, you'll likely find a list of sister cities at the bottom, which was the case for Auckland. I knew very little about the concept then but was nonetheless fascinated by what it could entail. This curiosity, however, lay dormant for several years. I eventually found myself in Sapporo on a one-year exchange, igniting my interest in Japan-New Zealand relations. Upon returning to New Zealand, I completed my degree and eagerly sought my next opportunity to return to Japan. This opportunity came through an opening to pursue post-graduate studies at Kobe University. But first, I needed a topic to research. Amongst the myriad of potential ideas, I recalled reading about Auckland's sister cities on Wikipedia years ago, many of which were in Japan. I decided to dig further. My search eventually led me to an organisation known at the time as "Sister Cities New Zealand".

It was 2017 when I first contacted Hiromi through Sister Cities New Zealand's website. I had no idea what to expect; I was just a fresh graduate at the ripe age of 20 with very little to my name. Much to my surprise, Hiromi, the then-president, promptly replied, welcoming me down to Wellington (about 640km from Auckland) to attend a gathering of board members and young leaders. I was ecstatic. I remember immediately telling my parents that the organisation's president had invited me down to Wellington to meet. Being a recent graduate with limited funds, I opted to catch an overnight bus to Wellington and another overnight bus back home that same day. Oh, how nice it was to be young. That fateful meeting was the first time I felt important as a young person, and it started a domino effect that is still in motion.

I left to study at Kobe University in late 2017, where I researched sister city relationships between Japanese and New Zealand cities and towns. I had the opportunity to survey over 20 Japanese local governments and interview five. The more I researched, the more fascinated I became. I heard countless stories of rich connections and relationships, many of which seemed implausible without the allure of sister cities. I myself had the pleasure of talking and connecting with a range of people with whom I shared little more than a joint involvement and interest in this obscure phenomenon called sister cities.

I eventually graduated in March 2020, just as Covid-19 was rearing its ugly head. Forced to return home to New Zealand, I couldn't let my passion for these unique relationships fizzle out. Hence, I embarked on a PhD, this time looking into community and volunteer engagement in sister cities. I have since travelled the country interviewing numerous individuals and groups about their experiences of sister cities, and again, I have found myself in awe of the stories, connections and relationships that have been shared.

Like the people I have talked to in my research, sister cities have opened countless doors in my own life. Since that first meeting with Hiromi in 2017, the people I have gotten to know and the relationships I have built have all been a testament to the fascinating and, I would dare say, magical allure of sister city relationships. At times, measuring the benefits of sister cities can be challenging, especially with ever-growing globalisation and internationalisation. Undoubtedly, technological advancements have allowed us to be closer than ever before; however, sister-city relationships remind us that we still need to be close as people - people who still want and need to feel connected. If recent global events tell us anything, we are in dire need of connections beyond cultural and national borders, which just so happens to be the forte of sister cities.

Taylor Marston - Auckland, New Zealand

*He aha te mea nui o te ao? He tangata! He tangata! He tangata!
What is the most important thing in the world? It's people! It's people! It's people!
- Maori Proverb*